手の熱

手の熱はするりするりと上がってゆき。
きりもなく。
空白の園にひたりひたりと満ちる月の光により
幾ばくか、冷やされるのみの為
存命の根拠は熱の内にぼやけ、
ただ。
熱の流れのまま、彼の岸へ、向かう。
往き過ぎる阿呆の舟のみが、
僅かに感じられる。